目白大学　人文学研究
第19号　2023年　55-68

冬季五輪のボブスレー・トラックの廃墟と痕跡からみる物質性と情動の地理

Geographies of materiality and affect considered from ruins and traces of the bobsleigh track in the Winter Olympics

山口　晋
Susumu YAMAGUCHI

Keywords：*materiality, affect, Winter Olympic , bobsleigh track*
キーワード：物質性，情動，冬季五輪，ボブスレー・トラック

要旨

本稿では一見すると廃墟あるいは「負のレガシー」といわれる棄却された冬季五輪大会のボブスレー・トラックから立ち上がる物質性や情動に着目する。とりわけ1972年に開催された札幌冬季五輪の痕跡となったそれがいかに偶有的に私たちを刺激するのかを示すことで冬季五輪大会報告書などに描かれる「規範的な地理や歴史」を揺さぶることが目的である。

Ⅰ．序

> 古(いにしえ)のスパルタは現代のスパルタの町はずれにあった。あった，というのは正確ではない。微(かす)かに跡らしきものはあったが，そこには何もなかったのだ。一面オリーブ畑になっており，石垣(いしがき)だったのか建物の礎石だったのか，地中になかば埋もれた石が散見されるだけだ。古代スパルタは徹底的な破壊にあったらしく，往時を思い出させるようなものはまったく残っていなかった。…（中略）…いくら歩きまわってもまったく何も残っていない。だが，それは私にはいっそ潔いものとして映った。アテネのアクロポリスの丘に立った時よりはるかに強いうねりのある感情が湧き起ってきた。（沢木1994：181−182）。

『深夜特急』の著者である沢木耕太郎は古代スパルタを訪れた際に遺跡の痕跡が何もないという状況に強い刺激を受けたという。古代スパルタには「往時を思い出させるようなものはまったく残っていなかった」のである。だが彼は「跡らしき」ものや「礎石」のようなものから刺激を受け，「強いうねりのある感情」が湧き上がってきた。最初，沢木はいくら歩きまわっ

やまぐちすすむ：社会学部地域社会学科 准教授

ても古代スパルタの痕跡に気づかない。広がる「オリーブ畑」を歩きまわる沢木は「地中になかば埋もれた石」に躓躓きでもしたのであろうか。いずれにせよその石に偶有的にぶつかり，それが古代スパルタの痕跡として立ち上がってくることで刺激を受けたのである。山口（2010）は『深夜特急』で描かれる物語が沢木自身の「反応」と「リアクション」によるものであることを指摘する。沢木も「移動」によって巻き起こる「風」を重視し，その「風」を受けて，自分の頬が感じる冷たさや温かさを描くことが紀行文の質を決定すると述べる（沢木2008：268）。もっとも沢木が強い刺激を受けるのは石や土，草，風といった非人間的なものよりも，訪れた土地に住む人との関わりである。

本稿で対象とするのは古代遺跡ではないが，冬季五輪でかつて使用され，棄却されたボブスレー・トラックを取り上げ，その物質性と情動に着目する。以下では冬季五輪開催都市である，南ドイツのガルミッシュ・パルテンキルヘン，イタリアのコルチナ・ダンペッツオ，長野そして札幌を取り上げるが，とりわけ札幌のボブスレー・トラックに着目したい。というのも以前，私は冬季五輪のスペクタクル性を再検討するため，ボブスレー競技をめぐる速度と知覚に着目して考察をしたことがある（山口2020）。そこではテクノロジーの進展とともにボブスレー競技の高速化すなわち「速度の上昇」が進むことで，それが私たちの知覚に大きな影響を及ぼし，さらなるスペクタクル化を亢進させることを明らかにした。さらに冬季五輪のボブスレー・トラックが閉鎖され，そこで競技が行われずに「速度が消滅」しても，ボブスレー・トラックの存在が私たちの知覚を揺さぶる。それを「スペクタクルの残りもの」とし，冬季五輪の過程として捉えることを提起した（山口2020）。その際に札幌冬季五輪のボブスレー・トラックを取り上げたのだ。スペクタクルを定式化したドゥボール（2003）はそれをイベントや見世物のみに用いるのではない。「スペクタクルの連続性」やその過程は以前から進展していた「メディア的環境整備」と不可分であるとし（ドゥボール2000：17–18），その複雑な様相の関係を消費社会における資本主義批判として展開した。地理学でもPinder（2010）は五輪などの「文化イベント」には社会経済的な不平等を隠蔽する側面があると述べ，ドゥボールに言及しながら，商品による社会生活の植民地化を批判する。速度とスペクタクルは深くかかわるが，ボブスレー・トラックの廃墟や痕跡の何が，どのように私たちを揺さぶるのだろうか。その時の研究の積み残しが物質性と情動に関するものであり，「負のレガシー[1)]」といわれるいくつかの棄却されたボブスレー・トラックを取り上げつつ，札幌冬季五輪のボブスレー・トラックを中心にそれらについて解明したい。実は冬季五輪大会開催以前からボブスレー・トラックの維持管理はすでに問題視されており，長野冬季五輪では長野市議会の議事でも懸念が示されていた（小泉ほか 2021）。さらには夏季五輪大会でもアテネをはじめ競技施設が廃墟となっていることはメディアでもしばしば取り上げられている。本稿のような作業は冬季五輪のみに限定されるものではなく，多くの問題が噴出しながらも，結局2021年に開催が強行された東京2020大会やそれ以降の五輪を含めたメガイベントを考えるうえで大変重要なものとなる。

物質性や情動については地理学者の森正人の一連の研究が大変参考になる。森によると物質

性とは事物や物質が人間に何を行っているのかということに着目する（2011：129）また森（2009）は文化的転回以降の英語圏における人文地理学の研究動向をレビューし，物質論的転回の批判的検討を進める。その中でCrang（1994）の遺跡に関する事例研究を引用し，存在論的転回に向かうイギリスの人文地理学の流れを説明する。Crang（1994）にとって遺跡は形ある物質として存在するが，それはまた実践において現前する。物体性において実在し，実践をとおして現前する物質が今度はわれわれにはね返ってきてわれわれの出来事を構成する。記憶も物質もアイデンティティの源泉ではないし（森2009：11），物質が重要なのではなく，物質がもつ物体性とそれが残す身振りの痕跡が，またそうした物質と人間との関わりの中で行われる事象の生成が問題なのである（森 2009：14）。森以外の地理学者の仕事として，成瀬（2012）は都市空間の物質性や彷徨う歩行行為からオースターの『ガラスの街』を読み解く。大城（2009）が述べる都市の「タンジブルな」景観と遊歩も物質性とのかかわりで理解することができる。大平（2022）も表象に加え物質性も有するモニュメントの意味作用を言語論を導入して明らかにする。さらに中島（2014）がCresswell（2013）を引きながらまとめたように人文地理学において物質性という言葉は多様な意味で用いられるようになり，それらは古典的な意味における「物」や固体的なものから，具体的なもの，光，音，運動，速度，持続性まで様々な観点から論じられているという（中島2014：19）。中島（2014）が述べる物質性を通じた身体的な共感や理解は私が取り上げた「知覚」とも通じる（山口2020）。

次に情動についてだが，ドゥルーズ・ガタリによると情動とは個人的な感情ではなく，一個の独立した性格でもなく，群れの力能を実現することにほかならず，しかもそれが自我を刺激し，自我のゆらぎを引き起こす（1994：278）。ここでは感情と情動は区別され，感情とは個人の内面にありテクストや記号によって把握される整頓された感覚傾向であり，情動とは身体の基層にあって知覚や感覚によって痕跡や残滓として看取されるものである（Massumi 2002）。スリフト（2007）も都市空間を感情の刺激により変様する情動の渦巻きとして捉え，人びとの感情が特定の都市空間でどう刺激され，それによって人びととの行為が集合的に形作られることで都市空間の有り様がどう変わるのかということを政治的な問題とする。理性ではなく，外からの刺激が感情をわき上がらせ，それが個人を刺激＝変様させるとすれば，人間個人ではなく群れとしての人間が問題となるのだ（森2021：188）。森が簡明に示してくれているが，人間は理性的ではなく，人間ならざるものからの刺激によって動かされるものである（2021：178）。それが情動であり，まさに情動とは生成変化なのである（ドゥルーズ・ガタリ1994）。これらのような視点を有する研究としてEdensor（2012）はマンチェスター中心部における建築石材の物質性から不在の現前と情動について取り上げる。ここでは非人間としての石材がその種類や岩質，砕石地，供給ネットワーク，使用目的などの複数性を帯びて都市に憑依することが示される。以下では廃墟や痕跡となったボブスレー・トラックとそれにかかわる物質に着目し，それらがどのように偶有的に私たちを刺激するのかについて示したい。それにより冬季五輪大会報告書などに描かれる「規範的な地理や歴史」を揺さぶること，これが本稿

の目的である。

Ⅱ．天然凍結トラックと人工凍結トラック

冬季五輪におけるボブスレー・トラックは大きく２つに分けることができる。ひとつは氷塊や氷雪を積み上げたり，低温の水をトラックに直接散布したりして凍結させる天然凍結トラックである。天然凍結トラックは石積みだったものからコンクリート製に変化してきた。もうひとつはトラック内に埋設された冷却管に低温の冷媒を流し，コンクリート表面に水を散布して凍結させる人工凍結トラックである。

各冬季五輪大会報告書によるとシャモニー・モンブラン冬季五輪のボブスレー・トラックのように初期の天然凍結トラックはカーブでのボブスレーの遠心力に耐えるような石積みのトラックになっている。1932年開催のレークプラシッド冬季五輪のボブスレー・トラックも直線部は土砂でカーブは石積みであり，多くの作業員が氷雪を積んでコース整備を行った。1936年開催のガルミッシュ・パルテンキルヘン冬季五輪でも気温の高い日中を避けて夜間に氷のタイルがボブスレー・トラックのカーブに敷き詰められ，整備がなされた。1952年開催のオスロ冬季五輪も水を噴霧して氷塊をつくり，ボブスレー・トラックを整備したのだが，大会初日の２月14日は気温が2.8℃まで上昇し，氷塊が融解しはじめたので，その整備に苦労したという。1956年開催のコルチナ・ダンペッツオ冬季五輪でも，雪不足によりトラックの整備が困難であった一方で極端な気温低下により給水管が凍結し，トラックの散水ができなかったことが報告されている。天然凍結トラックの整備は気温によって左右されることも多く，ボブスレー競技にも大きな影響を与える。サンモリッツ冬季五輪では日中の気温上昇で滑走が４回から２回に減らされたし，1932年開催のレークプラシッド冬季五輪も大会期間中の気温上昇によりボブスレー競技は閉会式後に延期された。1964年開催のインスブルック冬季五輪では2,000個の氷タイルがトラックの整備のために保管され，ボブスレー・トラックが初めてコンクリート製になった。札幌冬季五輪ではボブスレー・トラックの建設や整備に関する経験がなかったこともあり，1971年12月から氷雪を用いてトラックの整備がなされた。現在でも使用されている天然凍結トラックはサンモリッツにあるオリンピックボブスレーコースのみである（Komarova 2018）。いずれにせよ天然凍結トラックは気象条件の影響を強く受け，その整備に多くの時間と労力を要するものである。このような作業や整備がなされるのはできるだけ同じ条件でボブスレーが滑走できるようにするためでもあるが，氷の融解によるトラック表面の危険な凹凸や隆起，陥没とそれによる事故を防ぐためでもある。地域的な差はあれどもテクノロジーの進展とともに気象条件に左右されず，競技が実施できる人工凍結トラックが導入されていき，より安全に，より高速に競技することが可能となるのである。

しかしながら，以前より整備が進んだ人工凍結トラックは安全なのだろうか。ボブスレー競技とその空間は天然凍結トラックから人工凍結トラックへと変容することでより高速化してい

った。高速で滑走するボブスレー競技は「氷上のF1」ともいわれるが，大きな事故がしばしばみられ，1952年開催のオスロ冬季五輪でもベルギー代表のボブスレーチームが第3カーブで横転してリタイヤした。1964年開催のインスブルック冬季五輪では同じそり競技であるリュージュの練習中にイギリス人選手が頭蓋骨骨折で死亡した。2006年開催のトリノ冬季五輪では前年に起きた滑走事故の影響により，ボブスレー・トラックの整備計画が修正されることとなった。長野冬季五輪では重大な事故や負傷のリスクが高いボブスレー競技会場などでは救急搬送用のヘリコプターが待機していた。1976年開催のインスブルック冬季五輪ではボブスレー競技の公式練習と大会本番で大きな事故や選手の負傷がなかったことがインスブルック冬季五輪大会報告書に誇らしく記載されている。「2018年　ボブスレー国際競技規則」にもあるように主催者は公式練習と競技において選手が最高の状態で利用できるトラックにしなければならず，医療関係者の配置も義務づけられている。そもそもボブスレー競技は高速であり，安全性を考慮して天然凍結トラックから人工凍結トラックへと競技の空間が変容していっても依然として事故はみられる。

もう一点ある。1968年開催のグルノーブル冬季五輪では太陽の日射を強く受ける3ヶ所のカーブの部分のみ，アンモニアと液体窒素による人工凍結トラックが導入された。冬季五輪において本格的に人工凍結トラックが導入されたのは，1976年開催のインスブルック冬季五輪だが，インスブルックでは1964年に開催された冬季五輪の既存施設を使用しつつも，ボブスレー・トラックは新たに人工凍結トラックが建設された。この冬季五輪では初めてボブスレー競技とリュージュ競技が同一トラックで開催された。1980年開催のレークプラシッド冬季五輪も新たに人工凍結トラックが建設され，気温が10℃であってもトラックの表面が凍結するようになった。カルガリー冬季五輪では当時の最先端の冷却システムにより，気温が20℃でもトラックの氷を維持することができた。これにより10月から4月までボブスレー・トラックを使用することができ，競技者のトレーニング環境も飛躍的に向上した。また，トラックの温度が一定に管理され，カーブの部分に日よけが設置された。このことは長野冬季五輪におけるボブスレー・トラックの整備においても指摘されており，複雑な形状をしたトラックは時間や場所により直接日射を受け，日射を受ける箇所の氷質を維持・管理するために，注意深く氷心温度を制御する必要があるという（畔蒜ほか 1998）。だが常設である人工凍結トラックの多くはアンモニアによる冷却システムを導入していることから周辺環境に影響を及ぼし，有害物質が流出するような致命的な環境破壊を生むリスクがある（ベック 1998）。リレハンメル冬季五輪は環境に配慮した大会として知られるが（ゴールドブラット 2018），冬季五輪大会報告書によるとボブスレーの人工凍結トラックも周囲の地形を改変せず，植生を保護し，景観と調和するように建設された。長野冬季五輪のボブスレー・トラックもその冷却のために使用されたアンモニアはリレハンメル冬季五輪のそれの60分の1の量であり，環境負荷は少ないという。ボブスレー・トラック建設前に詳細な環境アセスメントが実施され，環境保護対策として建設作業前に除去した表土を慎重に保管し，作業完了後に元の場所に戻された。同様にバンクーバ

ー冬季五輪でも植物の除去を最小限に抑えたり，施設の設置面積を減らしたりするような環境対策がとられたし，2014年開催のソチ冬季五輪のボブスレー競技会場は，周辺環境への影響を最小限に抑えるために設計段階で他所に移設された。このように冬季五輪大会報告書にはボブスレー会場の整備にあたっていかに周辺環境への配慮がなされたのかが記載されている。しかしながら江沢（1999）などが指摘するように，会場整備において大幅な自然地形の改変がなされ，植生への多大な影響がみられたことはまぎれもない事実である。ボブスレー・トラックが建設されるために山腹が削られ，造成される。建設資材を運搬するためのアクセス道路が敷設される。コンクリート製のトラックとアンモニア冷却施設が設置されるのはその後だ。あわせて照明，音響，計測といった設備が配置される。ボブスレー競技の高速化の過程で巨大なコンクリート複合構造物としてのボブスレー・トラックやアンモニア冷却施設が建設され，それが廃墟となろうともその後も存在し続けるのである。

Ⅲ．ボブスレー・トラックの廃墟や痕跡とその物質性，情動

ここでは冬季五輪大会を開催した４つのボブスレー・トラックの廃墟や痕跡を取り上げる。とりわけ，解体し，消滅し，忘却が進む札幌冬季五輪のトラックについては空中写真を用いて取り上げ，物質性や情動について考えてみたい。

１．ガルミッシュ・パルテンキルヘン1936

ドイツ南部のバイエルン州にあるガルミッシュ・パルテンキルヘンのボブスレー・トラックは全長1,500mあまりで1966年に取り壊され，速度が消滅したトラックの痕跡である。ここに競技施設があったと現地で分かるものは野外に展示されている青色の２人乗りボブスレーとボブスレーをスタート地点まで引き上げるリフトの遺構，案内板，週１日開館される博物館ぐらいである。一周１km程度のリーサ湖の南側の山腹にあるこのトラックは木立の中にあり，散策路や登山道と間違えそうな土でつくられたもので，その側面は土砂の流出を防ぐための土留めの板材で簡易的に補強されている。辛うじてこのトラックのゴール地点付近にZiel Linieという小さな黄色の看板が掲げられている（写真1）。かつてトラックに積み上げられた氷は凍結したリーサ湖から切り出されたものでその湖畔にはホテルとレストランがある。冬季は積雪でボブスレー・トラックの痕跡が隠されてしまうので，ここが冬季五輪の競技会場であったことを偲ぶことは大変難しいし，そもそも人の姿が少ない。かつてトラックにつくられた大きなカーブはこの競技の大きな見どころであり，観客は高速で滑走し，時には横転するボブスレーに興奮しながら声援を送った。ガルミッシュ・パルテンキルヘン冬季五輪大会報告書にもルーマニアやドイツ代表のボブスレーチームが派手に横転している写真が掲載されている。「バイエルン・カーブ」と呼ばれたこのカーブには観客席が設置されたし，ゴール前の直線に続く大きなカーブであり，コーナーリングの技術が求められた。だが現在は積雪でここが最大の見ど

写真１　ボブスレー・トラックの痕跡とゴールライン
2020年２月筆者撮影

写真２　最大の見どころだったバイエルン・カーブ
2020年２月筆者撮影

ころであったことはもちろん，ボブスレー・トラックであったことを想像すること自体が困難である（写真２）。ゴールラインと同様に，バイエルン・カーブを示す小さな黄色い看板が設置されているのとカーブの内側をあがりきったところにこのカーブで亡くなった選手を供養する慰霊碑と説明板があるぐらいである。

２．コルチナ・ダンペッツオ1956

イタリア・ヴェネト州のドロミテ山脈の麓にある，このトラックは全長1,700mで高低差約120mをボブスレーが滑走する。サンモリッツとガルミッシュ・パルテンキルヘンのトラックで確立された当時の最新の基準に従って再整備された。ゆえにコルチナ・ダンペッツオ冬季五輪大会報告書にはこの３ヶ所が当時もっとも優れたボブスレー・トラックであることが明記されている。トラックには４台のテレビカメラが設置され，現地の観客よりもテレビの視聴者の方がボブスレー競技のすべてを見ることができる画期的な放送システムが構築されていた。だがそのようなトラックも2008年に閉鎖され，荒廃している。コルチナ・ダンペッツオはヨーロッパ有数のウインタースポーツのメッカであり，高級ホテルやレストランが立ち並ぶリゾート地である。しかしコンクリート製のボブスレー・トラックは荒れ果てており，スキー場のゲレンデを横切ってようやくアクセスできるスタート地点では，そこにあった建屋やその周囲にある関連施設は解体され，消滅している（写真３）。スタート地点のトラックの下には建設資材と壊れたボブスレーが無造作に放置されたままだ。私が現地を訪問した際は，たまたまの晴天で気温が高かったことから積雪が融けてこれらの廃墟を目にすることができたが，降雪量が多いとこれらがあることすら分からない。トラックをまたいで道路がはしっているが，それが陥没しないようにトラック内部に支柱が設けられており，ボブスレーが滑走することは不可能である（写真４）。ボブスレー・トラックの廃墟の横にはスキーゲレンデがあり，華やかなスキーヤーが滑降し，上空にはゴンドラが行きかうが，誰もこの廃墟には気づかない。しかしながら消滅した速度が「再開」する。2026年に開催予定のミラノ・コルチナ冬季五輪大会でこ

写真３　建屋が消滅したスタート付近
2020年2月筆者撮影

写真４　道路の陥没防止のためにトラック内に建てられた支柱　2020年2月筆者撮影

のボブスレー・トラックが再び使用される予定である。たしかにスタート地点などは消滅しているもののトラックの照明など再整備すれば使用可能な設備もあり，人工凍結トラックとして再利用されるという。

３．長野1998

先述のように自然地形や景観に配慮したといわれる長野冬季五輪のボブスレー・トラックは全長が1,300mあまりでそれゆえに２か所の上り坂があるものだった。だが2018年に冬季の使用が休止され，巨大なコンクリート製のトラックが残存し，自然環境に大きな負荷をかけていると言わざるを得ない。トラックの外側のウレタン材が剥落し，ボブスレーの飛び出しを防ぐ木製バリアは腐食が進んでいる。その側道はNPO法人日本ノルディックフィットネス協会公認のノルディックウォーキング・コースとして再利用されることになった。当然，このコースのために整備されたものではないのにもかかわらずである。ゴール付近にあるボブスレーを計量するための建屋は自然との共生をアピールするためか木製なのだが，周囲は雑草でおおわれて荒廃し，内部には建設資材が放置されている（写真５）。もう一つの大きな問題は堅牢な法

写真５　建屋が荒廃したゴール付近
2019年6月筆者撮影

写真６　廃棄が困難なアンモニア冷却施設
2017年10月筆者撮影

面の上につくられたアンモニア冷却施設である（写真６）。山腹を削り取ったところに設置されたこの施設はトラックに隣接して複数あり，有毒物質であるアンモニアを廃棄する際に多額の費用がかかるという点で長野市議会でもたびたび問題となってきた（小泉ほか 2021）。人工凍結トラックにはこの施設が付随するが，トラックが使用されなくなった場合にこれをどうするのかについての抜本的な解決策はない。2030年の冬季五輪大会がどこで開催されるのかは極めて不透明だが，もし札幌でそれが開催されることになれば，このトラックを使用することが予定されている。

４．札幌1972

札幌のボブスレー・トラックの痕跡は目的をもって探索しても目にすることがなかなか難しい。札幌テイネゴルフ倶楽部のコースのすぐ横で車道から少し入ったところにゴール地点があるが，その建屋は消滅し，コンクリートの土台のみ残存しており，ゴルフコースの管理された芝生と対照的である。スタート地点は手稲山の中腹である標高およそ490mに位置する。スタート地点のトラックの内側はコンクリートで完全に埋められてしまい，それがトラックであったことが隠蔽されており（写真７），今後このトラックをボブスレーが滑走することがない不可能性を改めて感じさせる。札幌冬季五輪開催から4年後の1976年に撮影された写真８の空中写真ではボブスレー・トラックが確認でき，ボブスレーを運搬したり，関係者が通行したりするアクセス道路が確認できる。ボブスレー・トラックの周囲の木々はその造成によって伐採され，関連施設も目にすることができる。それから40年あまりが経過し，2020年に撮影されたそれが写真9である。札幌冬季五輪大会報告書に写真で示されているスタート地点の建屋は現在，完全に消滅しており，現地で確認すると一部雑草が生えていないところがあり，苔むしたそれが建屋のコンクリート基礎であることに気づかされる。トラックの照明や支柱は風雪で茶色に錆びつき，またトラックにも枯葉がたまり山林に同化しつつある。全長1,500mあまりのこのコンクリート製のトラックは手稲山の山林がそれを覆い隠すばかりか（写真９），冬季になれば積雪により痕跡すら分からず，全面的に痕跡が消滅した「痕跡としての灰」となる（デリダ 2003）。他方，灰が燃え滓として残るものである以上，それは痕跡であり続けもする。灰は「全焼」の後に生き残るものであり，痕跡の完全な抹消の不可能性の痕跡であるとすらいえるかもしれない（桐谷2018）。札幌五輪のボブスレー・トラックは抹消の不可能性の痕跡である。足が急にコンクリートの破片にぶつかる，樹木と思ったものが錆びた鉄柱であるなど，不意にそれらに遭遇するのだ。痕跡は物質として偶有的に現前し，私

写真７　コンクリートで埋められたスタート地点
2020年10月筆者撮影

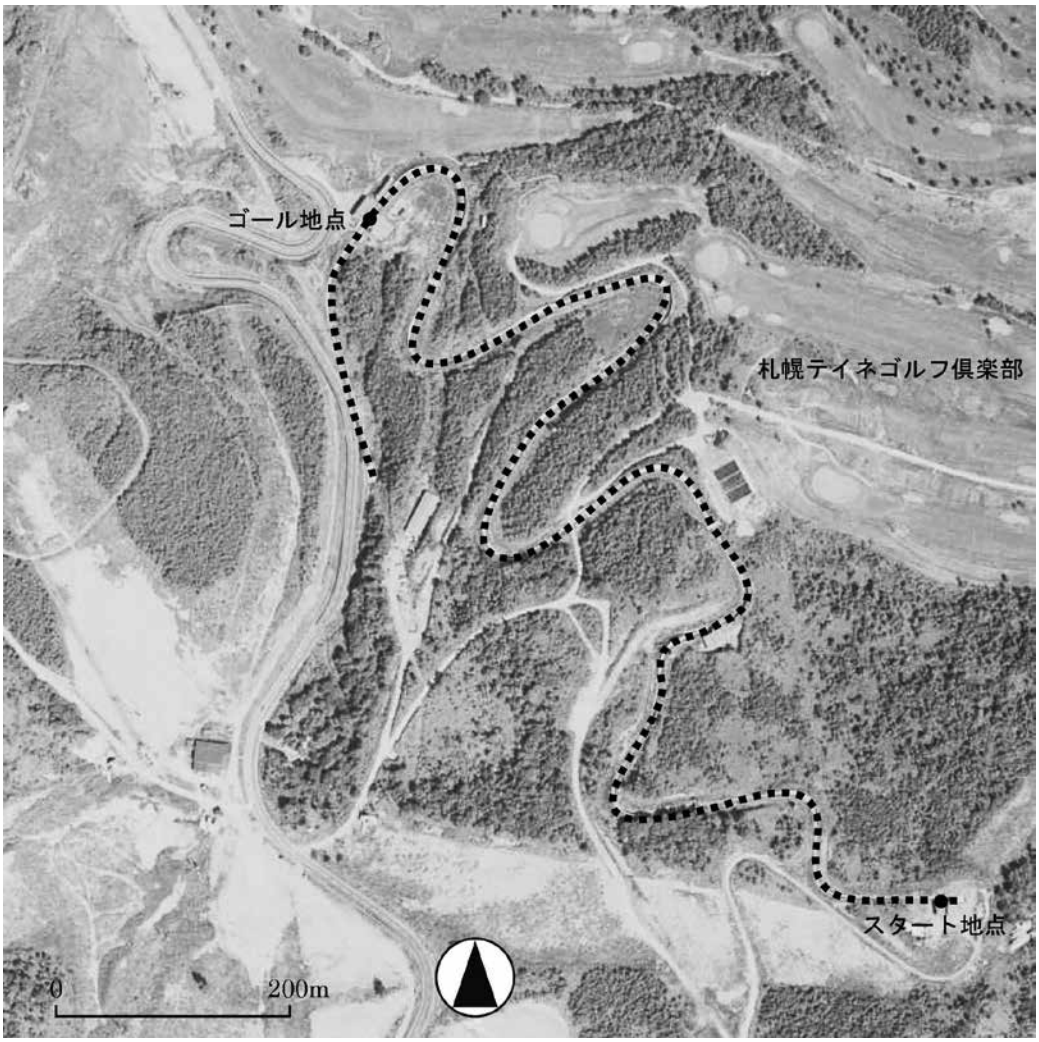

写真８　札幌冬季五輪のボブスレー・トラックの空中写真
撮影年月：1976年8月

たちと部分的に結びつく。このような「ミクロな感覚」（Massumi 2002）としての情動は，森（2021）が述べるように私たちそれぞれが災害や障害，風や泥と遭遇し，異なる刺激を受け，異なる身体となり，その異なる身体同士が部分的につながる感情の変化や推移の運動の様態である。情動的身体は命令器官から指令を受け，ぴったりと接合するものではないのだ（森 2021：231–232）。このトラックは速度が消滅し，冬季五輪大会の競技会場としての用途が完全に剥奪されているにもかかわらず，私たちを揺さぶる。これまでボブスレー・トラックの廃墟や痕跡と物質性と情動とのかかわりについて説明してきた。それでは今後の五輪などのメガイベントにどのような示唆が得られるのであろうか。

写真９　札幌冬季五輪のボブスレー・トラックの痕跡の空中写真
撮影年月：2020年8月

IV．今後の五輪のために―結にかえて―

> 滅びるものは滅びるものに任せておけばいいのだ。滅びのあとに生まれるものがあれば生まれればいい。滅びたものを未練に残しておくことはないのだ。スパルタは死んでいた。しかし，このスパルタの徹底して潔い死には，アテネのアクロポリスのあの壮大な骸（むくろ）のような美しさは打ち勝てないのだ，などと思ったりもした（沢木1994：182）。

本稿の冒頭で引用したのは古代スパルタの痕跡をめぐって立ち上がる物質性とそれと関わる沢木の情動についてであった。だが少なくとも本稿で確認してきた冬季五輪のボブスレー・トラックは「滅びたもの」，「徹底的な破壊」，「潔い死」では回収され得ない廃墟と痕跡であり，物質である。フィッシャー（2018）は加速化する後期資本主義の方向がなんとなく問題になることが分かっているのにもかかわらず，それに進んでしまう状況とオルタナティブがない現況を「資本主義リアリズム」とした。五輪大会を含むメガイベントが後期資本主義の産物であるとすれば，まさに五輪大会の競技施設の維持管理が問題になることが明白であるにもかかわらず，それを建設し，整備してしまう状況と一致しよう。ドゥボールが痛烈に揶揄するように「馬鹿げたものが尊重され，それを笑うことはもはや許されない」わけである（2000：28）。さらにドゥボールはブーアスティンの「疑似イベント論」を批判し，スペクタクルの演劇化のなかにひしめき合っている疑似的な出来事は，それらをよく知る人々によって生きられたものではなく，それらの出来事はスペクタクル的な機械仕掛けの欲動のそれぞれが産み出す加速度的な交代によるインフレの中で失われていくと論じる（2003：147）。

ガルミッシュ・パルテンキルヘンのボブスレー・トラックはモニュメントや博物館があったものの，土でつくられたトラックは積雪でそれを確認することが困難だった。コルチナ・ダンペッツオのトラックも隣接したスキー場のにぎわいと比べると人が近寄らない廃墟と化していた。長野のトラックの廃墟と札幌のトラックの痕跡は巨大なコンクリート製の構造物のみ残り，しかしながら，かつての歓声や滑走の音はきこえず，風の音や虫の声，静寂といったサウンド・スケープのみが私の身体を刺激する。なるほど札幌のボブスレー・トラックのように空中写真ではそれを視認することが難しく（写真９），自然に還ったという考え方もあるかもしれない。しかしながら，そのような自然の回復力を素朴に賛美することは痕跡としてあるボブスレー・トラックをみようとしないばかりか，五輪をめぐる多くの問題系を捉えることを放棄することと同義である。五輪大会が終わるとその熱狂が急速に冷め（そもそも熱狂があったのか），陳腐化し，人びとの記憶から忘却されるとその現場にさえ行くことができなくなってしまう。とりわけ札幌のトラックは「痕跡としての灰」である以上，忘却される可能性が極めて高い。その場から私たちに向かう刺激も情動も消滅し，ボブスレー・トラックが廃墟や痕跡になっている，あるいは隠蔽されているといったことすらも把握できない。冬季五輪をめぐる後期資本主義はむしろ忘却を推し進め，歴史を破壊し，あるいは歴史と記憶を麻痺させ，それを

放棄するものであり，それは「時間の虚偽意識」としてのスペクタクルである（ドゥボール 2003：148）。ゆえに再び蘇生させられるかもしれないコルチナ・ダンペッツオと長野のボブスレー・トラックは将来また維持管理の問題が浮上し，私たちが忘却したころには消滅しているだろう。さらにこのように競技施設が廃墟となり，痕跡となり，私たちに刺激を与えなくなり，忘却されたころには新たな施設が整備されるという状況は東京2020でも同様であり，このような施設整備や再開発の循環がオリンピックをオリンピック足らしめている。ドゥボールが『ル・モンド』誌の解説を批判しながら引用したように「存在するものについては，それゆえ，もはや話す必要はない」という開き直りのリアリズムであり（2000：14），それは「観客がそれを理解したり考えたりしうることとは完全に無関係に事をすすめる」のである（ドゥボール 2000：46）。だからこそ，ボブスレー・トラックなどの競技施設の「不在の現前」に耳を傾け，それを感じ，五輪スペクタクルの植民地化に抗するために楔をうつ必要がある[2)]。

追記

本稿にはJSPS科研費 基盤研究B（研究代表者：荒又美陽／課題番号：17H02432）の一部を使用した。また匿名の査読者から有益なコメントをいただいた。記して感謝したい。

【注】

1）競技施設が廃棄されるがごとく「負のレガシー」となることは地理学のみならず，社会学などの既存研究で指摘されている（例えば，荒又ほか 2018；石坂 2018；石坂・松林編 2013）。五輪のレガシーについてのより根源的な批判として阿部（2016）はそもそも現在と未来との関係は偶有的なものであるにもかかわらず，あらかじめ五輪のレガシーが計画されていることを指摘する。

2）とはいいつつも，五輪を開催する都市，国の組織委員会や政府からの説明や発信は「ポエム」であり（荒又2021），であるからこそ「資料を集め，調査をし，論理をつなげ，このイベントの不当性を訴え続けなければならない」（成瀬 2020：150）のである。

【文献】

阿部 潔 2016. 先取りされた未来の憂鬱――東京2020年オリンピックとレガシープラン．小笠原博毅・山本敦久編.『反東京オリンピック宣言』40–58. 航思社.

畔蒜鏡一郎・矢橋秀樹・大本真一郎・渡部正治・松尾　実 1998. 長野冬季オリンピックボブスレー・リュージュトラック製氷システム．三菱重工技報 35–2：128–131.

荒又美陽 2021. オリンピック開発と資本の論理――東京の特殊性はどこにあるのか．世界945：113–120.

荒又美陽・大城直樹・山口　晋・小泉　諒・杉山和明2018．東京オリンピックに向けて考える――グローバル化，都市・地域開発，セキュリティ．*E-journal GEO* 13：273–295.

石坂友司 2018.『現代オリンピックの発展と危機1940–2020――二度目の東京が目指すもの』人文書院.

石坂友司・松林秀樹編 2013.『〈オリンピックの遺産〉の社会学――長野オリンピックとその後の十年』青弓社.

江沢正雄 1999.『オリンピックは金まみれ――長野五輪の裏側』雲母書房.

大城直樹 2009. ポストモダン都市の遊歩をめぐる諸相．都市地理学 4：71–78.

大平晃久 2022. モニュメント・場所・比喩――文学碑の検討から. 長崎大学教育学部紀要 8：163–178.
桐谷 慧2018. 痕跡と失われたもの――ジャック・デリダにおける過去の問題. Résonances 10：85–93.
小泉 諒・杉山和明・荒又美陽・山口 晋 2021. 平昌冬季五輪から考える――南北関係, セキュリティ, 環境問題, 競技施設. *E-journal GEO* 16：232–261.
ゴールドブラット, D. 著, 志村昌子・二木夢子訳 2018.『オリンピック全史』原書房. Goldblatt, D. 2016. *The Games: A Global History of the Olympics*. London: Macmillan.
沢木耕太郎1994.『深夜特急5――トルコ・ギリシア・地中海』新潮文庫.
沢木耕太郎2008.『旅する力――深夜特急ノート』新潮文庫.
スリフト, N. 著, 森　正人訳 2007. 感情の強度――情動の空間的政治学にむけて. 空間・社会・地理思想 11：58–82. Thrift, N. 2004. Intensities of Feeling: towards a spatial politics of affect. *Geografiska Annaler* 86B-1：57–78.
デリダ, J. 著, 梅木達郎訳 2003.『火ここになき灰』松籟社. Derrida, G. 1987. *fel la cendre*. Paris: Des femmes.
ドゥボール, G. 著, 木下 誠訳 2000.『スペクタクルの社会についての注釈』現代思潮新社. Debord, G. 1980. *Commentaires sur la sociètè du spectacle*. Paris: Gallimed.
ドゥボール, G. 著, 木下 誠訳 2003.『スペクタクルの社会』ちくま学芸文庫. Debord, G. 1967. *La Sosiètè du spectacle*. *Paris*: Gallimed.
中島弘二 2014. 泥, 石, 身体――身体と物質性をめぐるポリティクス. 空間・社会・地理思想 17：19–32.
成瀬 厚 2012. 歩きて街に文字を刻む――ポール・オースター『ガラスの街』の間テクスト的分析. コミュニケーション科学 35：153–177.
成瀬 厚 2020. 日本におけるオリンピック研究. コミュニケーション科学 51：117-160.
フィッシャー, M. 著, セバスチャン・ブロイ・河南瑠莉訳 2018.『資本主義リアリズム』堀之内出版. Fisher, M. 2009. *Capitalist Realism: Is There No Alternative?*. Winchester: Zero Books, 2009.
ベック, U 著, 東廉・伊藤美登里訳 1998.『危険社会――新しい近代への道』法政大学出版局. Beck, U. 1986. Risikogesellschaft: *Auf dem Weg in eine andere Moderne*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.
森 正人 2009. 言葉と物――英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開. 人文地理 61：1–22.
森 正人 2011. 変わりゆく文化・人間概念と人文地理学. 中俣　均編.『空間の文化地理』113–140. 朝倉書店.
森 正人 2021.『文化地理学講義――＜地理＞の誕生からポスト人間中心主義へ』新曜社.
山口 晋 2020. 速度・知覚・スペクタクルからみる冬季五輪のボブスレー競技とその空間. 経済地理学年報 66：60–72.
山口 誠 2010.『ニッポンの海外旅行――若者と観光メディアの50年史』ちくま新書.
Crang, M. 1994. On the Heritage Trail: Maps of and Journeys to Olde Englande. *Environment and Planning D: Society and Space* 12：341–355.
Cresswell, T. 2013. *Geographic thought: a critical introduction*. Chichester: Wiley-Blackwell.
Edensor, T. 2012. Vital urban materiality and its multiple absences: The building stone of central Manchester. *cultural geographies* 20：447–465.
Komarova, M. 2018. World Bobsleigh Tracks: From Geometry to the Architecture of Sports Facilities. *Nexus Network Journal* 20：235–249.
Massumi, B. 2002. *Parables for the Virtual. Movement, Affect, Sensation*. Durham, NC: Duke University Press.
Pinder, D. 2010. Spectacle. In *The Dictionary of Human Geography, 5th Edition*, eds. D. Gregory, R. Johnston, G. Pratt, M. Watts and S. Whatmore, 717–718. Oxford: Wiley-Blackwell.

（2022年10月12日受理）